

小論文問題

2020(令和2)年度

【注意事項】

1. この問題冊子は「小論文」である。
2. 試験時間は60分である。
3. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
4. 試験開始後すぐに、以下の5および6に記載されていることを確認すること。
5. この問題冊子の印刷は1ページから5ページまでである。
6. 解答用紙は問題冊子中央に1枚はさみこんである。
7. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙がない場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
8. 試験開始後、解答用紙の所定の欄に、受験番号と氏名を記入すること。
(受験番号は2箇所、氏名は1箇所)
9. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
10. 問題番号に対応した解答欄に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
11. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
12. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
13. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
14. 試験終了時刻まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
15. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。



〔問題〕 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

平成という時代を一括^{ひとくく}りにして語ることにたしてどのような意味があるのか。社会が一つの国として完結するものでない以上、それはいくらなんでも無理筋というものではないかという思いがある。

《歴史感覚》なぞと言うのはおこがましいが、あえてわたしの《時代感情》と言うにしても、これまたあてにならない。1989年。ベルリンの壁の崩壊に象徴される「冷戦の終結」のあと、先進国でナショナリスティックな保護主義と排外主義が世界を席卷^{せつけん}しようとは、当時、想像だにしなかった。さらにあわせて、貧困と格差がこの社会の喫緊の問題になろうとはつゆ思うところではなかった。「バブル」という名のモノ・カネの氾濫を見やりつつ、消費が生存の普通の形になることで共同体というものが鬆^すのようになってゆくのを目撃してはいたが、それがやがて少なからぬ人びとにとって、日々食いつないでゆくこと、生き延びてゆくことの困難として浮上しようとは夢にだにおもわなかった。歴史の脈拍というものが、わたしにはまともにとれていなかった。とはいえそういう錯誤や失態を「大いなる過渡期」だからと、そのせいにするわけにはいかない。

歴史の脈拍というものをいったいどこでとったらいいいのか。歴史的な構造変容というものを測るためにどこに地震計を置いたらいいのか。なさけなくもこの課題はわたしにはいまもって手に負えない。

そこで、きわめて限られた位相ではあるが、わたしが平成の初めに取り組んだある問題のその後の帰趨^{きすう}を、あえて平成の30年に重ね合わせるかたちでたどることで、ここでの責めをふさぎたいとおもう。

その問題とは〈否定〉である。

事の発端はこうである。わたしにとって平成の始まりは、書き手としての活動の始まりと同期している。平成元年4月、哲学の論文集1冊と、衣服論とモード論の2冊、この3冊を同じ月に上梓^{じょうし}した。1冊は「哲学会」という集団に、あとの2冊はそういう集団の外に宛てて。

とりわけ後者の2冊は、ある限られた視角からのものではあっても、わたしなりの時代診断の試みではあった。〈消費〉にずっぽり浸った社会は、差異をたえず生産することでしか生き延びられない。「何かが終わって、いま、別の何かが始まりつつある」という物語を生産することで、つまりはこれまでとは違うものが生まれつつあるという幻想の下で、差異をたえず産出することで商品経済を回してゆく。わたしはこの「差異化」(これは当時「差別化」というなんとも品位を欠く言葉で表現されていた)の論理を「モード」の論理として解き明かそうとしていた。

そのなかで、当時「モード界」を席卷する勢いであった三宅一生(イッセイミヤケ)や川久保玲^{れい}(コム デ ギャルソン)、山本耀司^{ようじ}(ヨウジヤマモト)といったファッション・デザイナーの仕事に、“モードから下りるモード”がモードの最先端に位置するという逆説を見たのだった。流行から下りるというデザイン行為がもっともモーディッシュなもの、つまりは流行の先端としてもてはやされるという逆説である。流行外れ(アウト・オブ・モード)が、たとえば「自然派」だとか「エコ派」だと

か、別の一つの様式になれば、それは当然、モードの一意匠、つまりはワン・オブ・ゼムとしてモードに回収されてしまう。パンク・ファッションの青年がコンビニのレジ前の列に並ぶ、そんなコマーシャルがあったように、流行外れどころかアンチモードですら、同時代のモードのメニューに不可欠の一メニューとなっていた。「アウト・オブ・モードという最新モード」として回収されないためには、みずからのコンセプトや様式それじたいをもたえず裏切りつづけなければならないのだが、それもまた「不断の自己刷新の試み」、つまりは「永久革命」としてモードの最先端に祭り上げられる……。もはや出口なし、である。そのような悪夢から下りるには、服をつくることじたいから下りるしかない？ そう思いつめて不思議はない場所にまで「前衛」デザイナーたちは追い込まれていた、あるいはもっとしたたかに、そのふりをしていたようにおもう。だがその潔さが、あるいはそのふりが、ふたたび「最先端」というタグをつけられるのは必定だ。じっさい、たとえば腕が固定されて動かない、顔はすっぽり覆われるといった、着ることの無理な、そして色といえば黒ばかりの、葬式のようなコレクションが現われたのもその頃だ。

〈否定〉という行為が追いつめられている。〈否定〉の所作が歪^{ゆが}んできている……。そんな感触とともに始まったのが、わたしにとっての平成であった。

不同意から否認、拒絶、無視、さらには排撃や抹消まで、〈否定〉にもさまざまな水準がある。とりわけ、反抗や不従順、ぐずりやふてくされというふうに、若い頃の精神のおさまりのわるさは否定的な言辞で表わされてきた。エスタブリッシュメントへの抵抗、カウンターカルチャー（対抗文化）、ドロップアウト（意図的な落伍^{らくこ}）がまぶしく見える、そんな時代が、昭和40年代より平成まで、ずっと続いていた。そしてこれもまたモードという現象と無縁ではなかった、そういう反抗や対抗のポーズに多くの若者たちが煽^{あお}られた。そもそも流行という現象そのものが過去の絶えざる否定としてある。そういう否定をこそ否認する〈否定〉の思考が、そのまま前者の否定のかたちを知らぬまにみずからもなぞっているという苛^{いら}立ちが、おそらくここにはあったのだろう。

けれどもこうした〈大きな否定〉はいまの若い世代にはなじまないのか、「合わないな」「無理だな」と思えば、反抗も抗議もせずにその場から黙^{もく}ってずっと消えるか、あるいは見限^みってさっさと場所を変える。そういうふるまいを、わたしのいた大学という場所でもよく見かけるようになった。

〈反〉という抵抗を試みようにも、社会のほうですでに鬆^{ゆる}のようにすかすかになっていると感じるのか。あるいは、〈反〉という次元での抵抗など無効でしかないとすでに思い定めたのか。反撥^{はんぱつ}や反抗でもって社会が動く、そんなダイナミズムにはもはや期待しなくなったのか。いずれにせよ、〈社会〉の底が抜けだしたという思いが日々つのる……。そんな感触があった。

じっさい、この〈否定〉の思考や感情を〈否定〉の現実が追い越してゆく場面を、わたしたちはそれほど時を置かずして見ることになる。貧困と格差という〈否定〉が、それこそ身もふたもないかたちでわたしたちの社会に浮上してくる。

貧困はつねに相対的なものである。食事までもとれず、生存の維持すら危うい「絶対的貧困」も、人と自然との剥^むきだしの関係のなかで露^{あら}わになるのではなく、つまり食餌を求めて野をさまようのではなく、食堂やコンビニなど、廃棄される残飯に向かうことから察せられるように、隅に追

いやられた人びとというかたちで食糧の流通経路というシステムのなかに現出する。つまりそれは「分配」の問題である。いうまでもなくこの背景には、地域社会の「紐帯」^{ちゆうたい}の消失や非正規雇用の拡大、さらに「ワーキングプア」と呼ばれるような、働いても働いても貧困から脱しえないという労働市場や税制度の構造など、複合的な要因がある。しかもそうした貧富の格差は、「寄せ場」や「吹きだまり」といった限られた場所ではなく、社会全体に広がってきている。

戦後の困窮期から高度成長への「回復」のなかで、長らく日本社会は《一億総中流》という幻想に浸ってきた。住宅事情一つとっても、欧米諸国のミドルクラスと比べればお寒いかぎりだが、それでも人びとは社会から排出されることなく、じぶんたちが社会のぎりぎりのエッジラインに立っているとは意識せずにすんできた。日々じりじり気持ちを掻きむしられるのが、住居、服装、子どもの教育環境など、最低限の生活維持以外に使える懐具合の額としては小さいとはいえ、感情としてはかなり大きな「格差」であった。が、それでも人びとはじぶんが社会の周縁に立っているとはおもわずに済んできた。いいかえると、大勢の人たちが、じぶんがこの日本社会を構成する「普通の人」の一員だと思いなしえていた。

その「普通の人」ということでは一つ、折りにふれて思い出す行文がある。「日本人は普通の人がいらい」。ずっとそう憶えてきたのだが、中井久夫が記した文章はじつは以下のようなものである。（ここでの記述は米国人の歴史家と中井との架空の対話という体裁をとっているが、これは「私の自問自答」だと思ってもらっていいと、中井はことわっている）

なるほど、日本の政治家には魅力がない。では、なぜ、日本が近代化に生きのびられたか。日本では有名な人はたいしたことがない。無名の人が偉いのだ。めだたないところで、勤勉と工夫で日本を支えている無名の人が偉いのだ。この人たちが心理的に征服された時、太平洋戦争が始まった。（「昭和」を送る、1989年）

「勤勉と工夫で日本を支えている無名の人が偉い」。ここでいう「工夫」とは、「既存のものをあまり目立って変えないようにし、外見は些細^{ささい}に見える変更の積み重ねによって重大な障碍^{しょうがい うかい}を迂回し、精力の浪費なくして、中程度の目的に達すること」だと中井はいう。ただ、と、中井はここで一つの注釈をつける。「勤勉と工夫とに生きる人は、矛盾の解決と大問題の処理が苦手なのだ。そもそも大問題がみえにくい。そして、勤勉と工夫で成功すればするほど、勤勉と工夫で解決できる問題は解消して、できない問題だけが残る」というのである。戦後日本の保守系政治家たちは、事あるごとにバランス感覚が大事だとくり返してきた。ドラスティックで「極端な蛇行運転」ではなく「ヨットの操縦感覚」のようなものである。こういった物言いに対し、中井は、時代が安定しているときはそれでいいが、バランス感覚というのは「些細な軌道修正の積み重ね」だから、それだけでは「大変動には弱い」というのだ。

オミコシというものは、なかなかひっくり返らない。だれかが疲れて力を抜いても、その分

が平均に分散されて、オミコシは平衡を失わない。少数なら、ぶら下がっている奴がいてもかまわないくらいだ。しかし、ある限度以上を越すと、簡単にひっくり返る。

ここでいわれる「ある限度」とは、みずからの肩に重力を感じつつ、これにつねに一定度の対抗重力をかけ返しえている状態のことである。なにかの拍子に全体がわずかに傾いてふっと重力が抜けるときの、次の瞬間に対抗重力をかける用意をしておくこと。一定数の人たちがこの対抗重力をかけ返すことを怠るとき、オミコシは一挙に大きく傾き、修復が不可能になる。その対抗重力をみながかけてくれているとあてにしていながら、それぞれがみずからはその押し返しを怠るときが、じつはもっとも危ういのだ。

このことを考えるときに一つ、思い浮かぶ比喩がある。「国はまるで積み荷のゆるんだ大型貨物船のようである。船が傾くと荷物が全部偏り、船は沈んでしまう」という、ドイツ系英国人の経済学者、E・F・シューマッハーが1970年代に述べた言葉だ(『スモール イズ ビューティフル』、小島慶三・酒井^{つとむ}懋^{しほ}訳)。彼は社会にはある程度の大きさのくぐりが必要だという。市場を場とする経済の一つの基準が社会を支配し、さらには国境をも呑み込んで浸透しだすと、社会の内的なまとまりが崩れ、その構造が^{もろ}脆く、不安定になる。たとえば組合、結社、大学など、国家と個人の中間にある勢力が^{しほ}萎むと、個人も浮き草のように市場に弄ばれることになるというのである。

ある程度のくぐりが必要なのは、床面積を大きくしておくためである。それによって底面との摩擦がより大きくなるから、一人の重量を超えた重量が床にかかるから、である。だから横にずれること、雪崩を打つようにずり落ちることもない。とはいえ床面積が大きすぎると、こんどは全体のなかに個人の存在が解消され、個人が等質の砂粒のようになって、全体はおなじようにぐらつきやすくなる。要は、一人ひとりの役割がそれなりに見えて、そこをじぶんの「居場所」、つまりはじぶんがいていい場所、いなくてはならない場所として意識できている、そのような場所が要るということだ。

ところがこのある程度のくぐり、いいかえれば、国家と個人のあいだにある中間的な集団が、この数十年間のあいだにどんどん痩せ細ってきた。理由は一つ、生活維持のために不可欠の《相互扶助》を、食料の調達、保険や年金、育児や介護の施設が、行政もしくは大企業のサービス・システムに肩代わりされるようになったからである。人びとの生活共同体は《相互扶助》のしくみを欠くことができない。そのしくみが現代社会では、じかの「助け合い」ではなく、食料流通にしても、育児や介護についても、エネルギー源の供給においても、防犯・防災においても、匿名のシステムによるサービスを「買う」という構造(レジでの支払い、電気代・保険料の振り込みなど)に転換されたということなのである。

相互扶助という生活維持の最低の条件が、個人の支払い能力に転位させられている。当然、そのことによって、じぶんたちの生活維持にかかる負荷がじかに感じられなくなってくる。そう、御興^{みこし}の重さが実感できないのだ。リアルの水位が変わってくるのだ。

(出典 鷺田清一「小さな肯定」, 内田 樹^{たつる} 編『街場の平成論』所収, 晶文社, 2019 年。出題の都合上, 原文を一部改変した部分がある。)

- (1) 下線部 (A) 「〈否定〉という行為が追いつめられている」とは, どのような状態を意味しているのか。著者の主張に沿って 100 字以内で述べなさい。
- (2) 下線部 (B) 「〈否定〉の思考や感情を〈否定〉の現実が追い越してゆく」について, 「〈否定〉の現実」とは, どのような状況を指しているのか。著者の主張に沿って 200 字以内で述べなさい。
- (3) 平成の 30 年間に起きた社会の変化について述べた著者の主張の要約と, あなたが考える現代社会の問題の 1 例と, その問題に対するあなたの意見とを, 合わせて 300 字以内で述べなさい。